巻頭言

アルミニウムの美しさ

Beauty of Aluminum

鹿取 一男

Kazuo KATORI

話が私事になるので心苦しいがお許しを頂きたい。

私は昭和10年に埼玉県川口鋳物工業試験場に勤めたが、ここで初めてアルミニウムのインゴットを見た。それはノルウェー製で、蛸の足のように凹凸がたくさんあるもので、銀色に輝いていた。ツンと澄ました落ち着いた尊厳の風格ながら、金の艶、銀の寂とは違う軽やかな若い爽やかな美しさに私は魅了された。私はこれで美術工芸品を制作しようと思った。

当時はアルミニウムはニュームと呼ばれ一般の人々はニューム製品といえばベコベコの弁当箱を思い浮べるのがせいぜいであつた。

従つてこの金属で美術工芸品を作ることなどは到底考えられなかつた。当時私は文展（今の日展）に出品していたので、審査員の先生に私の意図を相談して見たが、案の定、卑しい金属は文展の品位にかかわるから無理だとのことであつた。

しかし私はどうしてもこの意図を世に問いたかつた。当時の美術工芸界は高村豊周先生が中心になっている實在工芸展が文展を凌ぎ、ここは新人作家の登竜門でもあつた。私は意を決してここに出品をした。幸い入選するとともにニューム製の美術品ということで、えらい評判になつて随分新聞などにも書かれた。

この作品は40 cm 位の花瓶で、合金は含銅シルミンに、青味を増すために少量のニッケルを加えたものにした。花瓶の胴には笹の葉をあしらひ「笹文花瓶」と題名をつけた。肌は炭研ぎした後、硬髻で軽く荒し、漆で陰影をつけたと記憶している。

ともかくアルミニウムが美術工芸品として初めて上野の森に座を占めたことは本当に嬉しかつた。私は制作した作品のほとんどを手放してしまつたが、この作品だけは今でも大切にしている。

今は日展を始め、東京芸術大学の卒業制作展にもアルミニウムの作品がしばしば出品されている。そして誰もアルミニウムを卑しい金属だと思う人はもういない。アルミニウムの鑄造や加工の技術、さらに表面処理技術などの進歩によつて、今はインテリアやエクステリアの分野に、美しい色彩のアルミニウムの製品がかなり進出し、私共の生活に潤いを与えている。

しかし私は残念だと思うことがある。福岡市の天神の地下街は広場や通路の天井、また防火扉やスクリーン、手摺までアルミニウムの鑄物である。全長360mの2本の地下街一面に使われたアルミニウムは100トンと聞いている。しかもアルミニウムの鑄物は地下街の不燃性化にも役立つている。よくここ

でアルミニウムの鋳物を使つたものと思う。

ところがこのアルミニウムの鋳物はフタル酸樹脂塗料で鉄色にしてある。そのためにアルミニウムの感覚ではなく、鉄製品の趣きである。それでも鋳物であるために照明に輝き、肉高のレリーフの作る陰はそれなりに美しい。しかし鉄色からくる重厚さと暗い淋しさはぬぐえない。

私はなぜアルミニウムの材質を生かした爽やかな明るい色調にしなかつたかと残念に思う。

また、PR のパンフレットに「ゆとりと華麗と友情…福岡・天神に生まれる鉄と煉瓦と石だたみの街」とある。どこを見てもアルミニウムと書いていない。だから一般の方々はアルミニウムの鋳物であることを知らない。この地下街に関係したデザイナーは私の知人なので「どうして鉄と煉瓦と石だたみにしたのかと聞いて見た。彼は「鉄は詩になるが、アルミニウムでは詩は作れない」とのこと。確かにその通りかもしれない。パンフレットも「アルミニウムと煉瓦と石だたみ」ではロマンがないし、美しくもない。

鉄は太古からずっと人間とともに歩み続けていて、もう私共の心の中に違和感もなく座っている。例えば鋳鉄製の茶の湯釜は、その形とともに砂目砂やあられ文の美しさで茶道の中心でもあり、侘の趣きをかもし出している。まさに鉄には詩情がある。

ところがアルミニウムはまだ歴史が浅い。それに和語ではない。だからアルミニウムという言葉も文字も色調も、私共の心にうまく収まらず違和感を感じるのである。強く表現すればアルミニウムはまだよそ者なのである。

それだから天神の地下街はアルミニウム鋳物を鉄製に似せ、市民の方々により融合するようにしたのであろう。

私が笹文花瓶を制作した昭和10年頃はこの感覚がもつと強かつた。それで制作で最も苦労したのもこの違和感であつた。もしこれを消去することができなかつたなら落選していたに違いない。

私は物の本質を曲げて他の物に似せることを好まない。アルミニウムもその本質を生かしアルミニウムであることを誇りとするのでなければならぬと思う。アルミニウム製を鉄器や銅器に見せるのはまがい物作りで、好ましいことではない。

アルミニウムがインテリアやエクステリアに進出していることは嬉しいが、鉄器や銅器に似せているのでは、まだまだ本道を歩いているとはいえない。

現代はカナ文字が非常な勢いで私共の身近に増えている。カナ文字も次第によそ者ではなくなりつつある。日本の文化も「竹の柱に萱の屋根」のボタニカル・カルチャーから、「金属とコンクリート」の不燃性都市文化のミネラル・カルチャーに変貌しつつある。

この文化の気運にアルミニウムが乗れないはずがない。アルミニウムの文字も、色調もそれ独自のフイーリングがある。軽薄にならない上品な爽やかな美しさがアルミニウムの身上だと思う。こうした感触をミネラル・カルチャーの中に、どのように位置づけするのが、これからの課題ではなかろうか。

アルミニウムに携わる方々の努力によつて、いつの日かアルミニウムが違和感なしに私共の心に座を占めるときがくることを願うものである。